

身近な人の戦争体験を取材して

安形 茂樹

戦後七十年の節目に

二〇一五年、私にはやってみたいことがあります。身近な人の戦争体験を改めて取材し、記録に残すことです。そして「戦争体験を聞く会と企画展」を実施することでした。身近な人たちが戦争に巻き込まれていった事実を知り、真実を伝えることは、平和を守り、不戦を誓う力になるものと信じています。

身近な人にこだわるのは、体験の重みです。家族や親戚、地域の身近な人だからこそ、自分に関わるものとして戦争や平和に向き合うことができると思います。「戦争体験を聞く会と企画展」はタイムリーな企画として注目され、テレビ局と新聞の報道により、盛会となりました。

取材のきっかけ

五年前の平成二十二年、八名小学区で戦争体験談を募集しました。目的は、八名小学校五十周年記念誌「わたしの八名」を作成するため、戦争時代の体験談は欠かせなかつたからです。結果として、五十二名の体験談をまとめることができました。別冊で「わたしの戦争時代」を発行することになりました。その時の取材で強く感じたことは、貴重な体験が意外に語られていないことでした。家族にさえ話していない人も多くみえました。しかし、ほとんどの人は当時のことを鮮明に覚えてみえ、涙ながらに話されるのです。今の私たちの幸せは、戦争時代を体験された方々の悲しみの上にあることを痛切に感じました。

今回の取材

六月、八名地区全戸に体験談募集の案内を配布しました。今回取材し、記録にまとめることができましたのは、二〇一五年十二月現在で十七名です。そのうち自分から取材を申し込まれた方は八名、九名はこちらから取材を依頼した方でした。取材希望が激減したことが五年前との大きな違いです。戦争時代を体験された方が高齢となり、自ら語れる人が少なくなつたということでしょうか。

また、戦場体験者は講演を依頼した原田久史氏を含め、わずか三名でした。召集令状で戦地へ行かれた方は、九十歳以上のご高齢です。ですから当然の結果といえます。

つながる人

取材させていただくと、その方の家庭生活や考え方が否応なしに見えてきます。今でも戦争の後遺症に苦しんでいる方もみえます。体験を初めて聞いてもらえたと、

涙を流し感謝された人もいます。どれほどの重荷を背負ってみえたのかと、暗澹とした気持ちになります。取材した一人一人にドラマがあります。多くの人がつながった事例を紹介いたします。

野沢（旧姓安形）やすさんは、

中宇利出身で新城高等女学校から豊川海軍工廠へ学徒動員されました。二十二名が犠牲になった新城高女第三十二回生の一人です。至近距離に爆弾が落ち、奇跡的に命を取り留められましたが、爆弾の破片が今も体内に残っています。

新城高女を海軍工廠へ引率し、世話をしていた教師の一人が浅見巖先生でした。家は富岡で、息子の英紀さんは企画展に先生が撮られた写真を提供してくれていました。提供写真を通して、当時三十七歳だった浅見巖先生が新城高女に勤務していたことは分かっていますが、工廠へ引率で行かれていたことは野沢やすさんの体験談

で初めて知りました。やすさんは、同じ防空壕に巖先生もいて、先生の指示で外に出たと語ったのです。英紀さんは、父の指示のために六名の女生徒の命が奪われたのではないかと心配されました。

英紀さんによると、巖先生は工場の空襲後、一週間ほど家に戻らず、家族はみんな死んだものと思っただけですが、ある日の夕方、真つ黒に汚れた姿で戻ってきたそうです。ひどく落ち込んだ様子で、まるで夢遊病者のようだったそうです。工場で何があったのか、とても聞くことはできず、知るすべもなく、その後も先生は工場の話は一切しなかったそうです。

野沢やすさんの同級生で、当時富岡国民学校へ赴任し、英紀さんたち一年生を担当された加藤（旧姓植村）恭子先生に、英紀さんが体験談のコピーを送りました。恭子さんは、七十年前の級友の悲劇を初めて知り、驚き、涙し、他の同級生に連絡されました。

偶然にも十一月六日に新城高校の文化祭で、「新城高女の悲劇」を調べた佐藤道洋先生（企画展で既知）の展示発表に合わせて同級生が集まるというのです。恭子さんの誘いもあり、ホテルで七名の三十二回生と英紀さんと食事をしながら話を聞くことができました。

三十二回生は、何度も級友を追悼する法要に集まったそうですが、同級会は五十回忌が終わるまで開かなかったそうです。同級会でも、工場のことはあえて触れず、話題にしないようにしてきたそうです。そのため新城高女の記録がほとんどなく、やすさんの体験談が衝撃的だったのです。

英紀さんは、教え子の皆さんから、巖先生は生徒思いで、父親のように優しく面倒見のよい先生だったと口々に言われ、教え子から慕われていたことを知りました。私は、巖先生の指示に間違いはなかったと思います。避難した会計部の防空壕は、正門から東へ三

番目の棟の近くにあり、正門から出ると指示するのは当然です。教師なら生徒を安全な廠外へ出したと考えるはずですが。正門を出てから爆弾が生徒の至近距離に落ちるとは、誰も予測不能ですから。

新城高校の佐藤先生が入手した昭和二十八年十月発行の雑誌「婦人倶楽部」に「豊川海軍工廠の姫百合」という特集記事があり、巖先生の言葉が載っていました。

「鈴木先生（引率女教師）、ぼくは生きてるのがいやになった。なぜ、あの時死ねなかったのかと……、口惜しくてならないんです。」

生徒が死んで、先生が二人とも生き残っているとは一体どういう意味なのか、と保護者から二人の教師は責められたのです。二人は教え子の死体をさがしてまる一週間、鬼火の燃える廠内で暮らした、と書かれています。

英紀さんが穏やかに言いました。「七十年前の父の苦悩する姿がやつと理解できました。」と……。

今思うこと

・少ない加害体験

体験記録に加害体験はほとんど出てきません。誰しも語りたくないし、触れられたくない部分だからです。それだけに貴重ですが、そのまま記録にできないこともあります。五年前の取材で、中国人捕虜を「銃剣で突かせてくれた」との証言がありました。なぜ「突かせてくれた」なのか、その答は河部義通氏の講演にありました。「当時は人を殺せば英雄だったんです。それが自慢だったんです。」戦争の恐さは、「人が人でなくなる非日常の世界」、「殺すか殺されるかの世界」となることです。加害体験はそれを証明しています。

・出合いに感謝

取材には多くの人との出合いがあり、感謝し感謝されることの連続です。新城高女の皆さんはじめ、取材は今後も続けます。体験記録は「富岡ふるさと会館HP」をご覧ください。戦後は続いています。